

天理参考館 ニュースレター

天理大学附属天理参考館
発行日：2007. 3. 16
発行：天理大学附属天理参考館
編集：広報普及

ごあいさつ

天理大学附属天理参考館
館長 岩井 孝雄



当館の活動内容をより多くの方々に情報として発信したいと考え、昨年秋季に創刊しました『天理参考館ニュースレター』の第2号をお届け致します。

*

「この冬はかつてないほど季節感のない、冬らしくない冬でした」と書いた原稿は三月に入ってから訂正を余儀なくされました。東大寺二月堂修二会(お水取り)も終わりに近づいた頃、北日本を中心にさながら厳冬のような寒の戻りがありました。これは、大自然のバランス感覚の一端?を見せつけられたようでもあり、春の到来を待ち望む心の大切さを再認識させてくれたの

だと、只々、謙虚な気持ちになりました。

*

館長室の窓から西方を眺めると、二上山から葛城、金剛に到る山々が一望できます。春分・秋分の頃、二上山に入る目映い夕日の中に、古人(いにしえびと)の祈りを見るような気がします。また、東から南へと目をやれば、山裾に山の辺の道を抱き、三輪へと続く大和青垣の山並みを間近に見ることが出来ます。道行く人は万葉歌碑に古人の夢のあとを偲び、或いは新緑、紅葉の季節には、その風景が織り成す自然の彩色に心を動かされることでしょう。そのようなことごとくに思いを廻らせ、ここへの散策へと誘ってくれるのが、日々、窓に映る情景です。

*

さて、山の辺の道の天理と桜井の中間に、周辺の観光情報の提供と休憩施設を兼ねた

天理市トレイルセンター(トレイル青垣)があります。同施設内には当館関係資料の展示コーナーがあり、案内リーフレット、企画展等のちらしを置かせて頂いております。



山の辺の道で古代に思いを馳せた後は、是非、天理参考館にお立ち寄り下さい。3階「世界の考古美術」展示場では、当館が所在する布留遺跡周辺での発掘調査で出土した主要な遺物と、布留遺跡でみつかった埴輪などから、古墳時代の祭場の様子を復元していきます。

*

新年度も企画展やトーク・サンコーカン(公開講演会)、ワークショップなど多彩なイベントの開催を企画しております(詳細はホームページをご覧ください)。皆様のご来館をお待ちしております。



お知らせ 国際博物館の日

毎年5月18日を「国際博物館の日」と定め、地域住民の幅広い参加を得て、博物館の存在理由を全世界の博物館とともに、それぞれの地域社会にアピールする機会として開催されています。

当館は、この趣旨に賛同し、5月18日を含む左記期間にご来館されました方に、記念品を配布する予定です。

◇期間／5月14日(月)～20日(日)

企画展 第54回企画展

遣隋使・遣唐使が

出会った人びと

―中国隋唐陶製人形の美―

会期/4月11日(水)了6月11日(月)

遣隋使・遣唐使が大海原を越えてようやくたどり着いた中国。そこで出会った人びとの姿に、彼らは大いに驚いたことでしょう。

隋・唐時代に貴族の墓に納められた陶製人形(俑)は、当時の人びとの姿を実によく示しています。宮廷に仕えた役人や武人、着飾った女性たち、シルクロードをはるばるやってきた西方の人びとなど、さまざまな人びとがあり、また馬に乗る姿や、楽器を演奏したり踊りを踊る姿など、当時の人びとのさまざまな活動の様子を見ることができ、また、これらを通して、遣隋使・遣唐使が感じた驚きの幾ばくかが我々にも感じられることでしょう。

中国では、陶製俑を副葬する習慣は長きにわたって行われましたが、隋・唐時代の俑は造形の精緻さや装飾の華麗さで群を抜いていると言えます。本展では隋・唐時代の人物俑82点を中心に、さらに人びとのまわりに存在した動物や

器財などの陶製明器15点を加えて、隋・唐時代の人びとの華やかな生活を垣間見ることとしましょう。

会期中には、列品解説と公開講演会を左記のとおり開催いたします。

◆関連イベント 公開講演会

「造られた形・描かれた姿から見る唐代

―太宗昭陵と陪葬墓を中心に―

講師/秋山進午氏

(大手前大学史学研究所所長)

日時/5月12日(土)午後1時30分から

会場/当館研修室

◆列品解説

日時/4月26日(木)・5月25日(金)

いずれも午後1時30分から

会場/天理参考館 3階企画展示室

担当/小田木治太郎学芸員



左:加彩文官 右:加彩女子 中国 唐時代

海外調査

モチゴメが主食

―ラオス人の暮らし―

当館では世界各地の生活文化などを紹介していますが、来館されるみなさんにとつて、ラオスは東南アジアの国々の中でもっともなじみのうすい国ではないでしょうか。

地図で確認していただければわかるように、ラオスには海がありません。タイ東北部の国境を流れるメコン川に生まれ、豊富な平野とその後背に連なる山々で国土が成り立っています。外来の文化がラオスに到達するには、このメコン川を遡ってくるのがベストと思われませんが、ラオス南部のカンボジアとの国境付近にあるコーンの大瀑布がその行く手を遮ってしまうのです。昔新しい文化がラオスにまで達するには、相当の時間が必要とされたのでした。それだけに伝統的な文化がよく残っているといえるでしょう。東南アジアの内陸の地に礎を固めた仏教文化がしっかりと根つき、決して裕福とは言えないまでも、与えられた状況に満足して暮らす人々の姿には心打たれる思いです。私達日本人にとって昔懐かしい風景が、



竹で編んださまざまな大きさのタイプカオ

村のあちこちに見られます。

また、ラオスは49民族からなる多民族(二〇〇〇年ラオス政府発表)で構成されています。それぞれの民族はラオスだけにいるのではなく、中国や東南アジア各国に広く分布しています。各民族が互いに共生しながらも、独自の文化を守り続けているわけですが、そんな人々の暮らしぶりに共通するのが、モチゴメ(おこわ)カオ(カオ)を主食としていることです。おこわを食べる習慣はアジア各地に広まっていますが、主食にしているところはほんの一部にしかすぎません。それが、ラオスでは一部の民族(高地ラオ、モン族など)を除き、全土で主食となっています。

日本では正月に餅を食べ、おめでたい時に小豆入りのおこわ(赤飯)を炊いてお祝いをします。ラオスでは毎食、タイプカオ(飯カオ)に入れられたおこわ(カオ)がでてきます。毎日(祝日)のような感じですが、その味はやみつきになるくらいにおいしい。ついつい食べ過ぎてしまいます。

今秋、当館ではそんなラオスの人々の暮らしを総合地球環境学研究所と国立民族学博物館の協力を受け、三者共催で「モチゴメの国ラオス」メコン川流域の暮らしを開催します。モチゴメの食習慣や稲作、漁労に携わる人々の暮らしぶりをラオスから収集した資料や現地の写真を用いて紹介します。ご期待下さい。(吉田)

周辺の
見所

天理外国語学校校舎



天理外国語学校校舎

大正十四年に天理外国語学校が設立され、翌年に鉄筋コンクリート造り三階建ての立派な校舎が完成しました。校舎内の小高い丘に出現した巨大な白亜の殿堂は、校主であった中山正善二代真柱の海外布教にける並々ならめ決意を示すとともに、当時の人々を大いに驚かせたことでしょう。昭和五年になつて教室の一つに海外民族資料を集めて、学生たちに外国語だけでなく海外の生活風俗習慣を勉強するための海外事情参考品室が開設されました。これが天理参考館のはじまりです。爾來七十有余年、天理参考館は設立の趣旨に沿つてゆつくりと確実に歩み続けています。正面玄関に大正末期の洋風建築の雰囲気を残した外国語学校校舎は、今も天理大学の一号棟として大切に保存活用されています。(竹谷)

資料
紹介

幾何学文把手付鉢



前1500-1200年頃 口径16.5cm

西アジア独特の遺跡にテルがあります。古代、建築物は日乾レンガで作られていました。建物が壊れると、崩れ落ちた日乾レンガを平らに均し、その上にまた建築物を造ります。同じ所に造るので当然丘のように高くなり、次第に面積は小さくなりまゝです。こうしてできた丘のような遺跡がテルなのです。イスラエルのテル・ゼロールも二つの丘からなっています。この遺跡を日本オリエント学会が一九六四年から一九六六年にかけて発掘調査しました。その時出土した遺物はイスラエルと日本とで折半されました。当時は遺物を国外に持ち出せたのです。持ち帰った遺物は永らく当館に寄託されていましたが、二〇〇三年に日本オリエント学会から寄贈されました。学術発掘による出土遺物なので、その資料価値は計り知れませんが、本資料もその一つで、後期青銅器時代の遺構から出土しました。白色スリッパで被われていることからミルクボウルと呼ばれるキプロス製の鉢です。半球形の胴部に、把手を一つ持ち、彩文が施されています。轆轤を用いず、手握ねで成形されるために、器形は非対称的で歪みがあるのがお分かりでしょう。キプロスとの関連を示す貴重な資料です。(巽)

資料
紹介

3等乗車券
—世界初の地下鉄—

当館では、故山本不二男氏が収集した全園でも有数の交通資料コレクションを収蔵しています。今回はそのコレクションで中核をなす鉄道乗車券から興味深い資料をご紹介します。今日、地下鉄は都市交通の中で重要な役割を果たしていますが、その始まりは今からさかのぼること140年あまり、まだ日本は幕末動乱のさなかであった一八六三年のロンドンのことです。パディントン〜フアリンドン間の約6kmを開業したメトロポリタン鉄道は、動力に蒸気機関を用いたため、煤煙対策に苦心したようので通気口を設けるなど工夫を凝らしましたが、一九〇五年にはすべて電化しました。掲出は、上記創業区間内にあるゴワーストリート(現ユーストン・スクウエア)〜エドウェアロード間のエドモンソン型3等乗車券で、この路線は現在もハーマスミス&シティー線の一部として使用されています。大英博物館からさほど遠くないゴワーストリートから、シャロロック・ホームズで有名なベーカーストリートを越え、エドウェアロードへ。当時ロンドンでしか乗ることができなかった地下鉄はどのような乗り心地だったのでしょうか？(乾)



イギリスロンドン 1892年 縦3.0cm

発掘
調査

天理参考館分室 2

昭和52年5月28日、布留町にありますおやさとやかた東棟北側に、収蔵庫を備えた2階建てのプレハブが完成しました。その入口部分に、発掘調査団の看板と共に、真新しい桧の板に「天理参考館分室 No.1」と墨書された看板が掲げられました。これを機に、出土遺物の収納は参考館の収蔵庫からプレハブ棟へと替わり、発掘調査の準備から遺物の整理に至る業務は、ここで行うことになりました。この日を分室創設の日としています。昭和54年には調査団棟が手狭になってきたという理由で、永原町に移転することが決まり、それに伴って分室も移動することになりました。建物もプレハブ棟から鉄筋三階建てのしっかりした建物に替わり、今まで無かった各種研究室、作業室、写真撮影室、保存処理室、事務室、食堂などが完備され、今まで以上に作業の能率を上げることが出来るようになりました。中でも、天理教教会本部東西礼拝場やおやさとやかた南石第三棟(高安詰所)などの規模の大きな建設工事においては、発掘調査を行うに当たり、その役割を充分発揮出来るようになりました。現在、分室の入口には風雪に耐えた二代目の看板が力強く立っています。誕生から30年目を迎える分室ではありますが、これからの行く末をこの看板はきつと見届けてくれることと思われまゝです。(太田)

公開講演会

トーク・サンコーカン

広く一般の方々に当館をさらに身近な施設として利用していただき、諸文化の理解と教養を深めていただくことを目的とする公開講演会です。

講演は、いずれも午後1時30分(受付は午後1時)から。受講無料(入館料が必要)。

第一七二回

「大仏鉄道の跡(あと)をたどる」

◇月日／4月21日(土)

◇講師／乾 誠二(当館学芸員)

「奈良の大仏さんの名を冠した駅が、現在の奈良駅の北約1kmにあったことをご存知でしょうか? ちょうど一〇〇年前に廃線となった大仏鉄道―関西鉄道大仏線の、かつてをしのぶ資料や現在の写真から、その歴史と路線跡をたどります。※6月2日(土)に大仏線廃線跡を探访するワークショップ開催を予定しています。」



大阪大佛間 三等往復乗車券(見本) 関西鉄道 明治35年

第一七三回

「中国の民間版画 ―当館所蔵資料と」

―南通市での調査報告を中心に―

◇月日／5月26日(土)

◇講師／中尾徳仁(当館学芸員)

中国では、古くからさまざまな版画が作られてきました。しかし、印刷技術の進歩によ

り、最近では手刷りの版画は姿を消しつつあります。

館蔵の中国版画を一部紹介し、同時に中国南通市・蘇州市における版画製作の現状についてお話しします。



版画「一团和气」

第一七四回

「ヨーロッパの素朴なおもちゃ」

◇月日／6月23日(土)

◇講師／梅谷昭範(当館学芸員)

子どもの頃、誰もが一度は手にするであろう遊び道具「おもちゃ」。世界各地にはそれぞれの地域の特徴を反映したおもちゃが伝統的に存在します。素朴な中にも、職人的気質が感じられるヨーロッパのおもちゃを各種紹介します。

第一七五回

「明治時代からの案内状」

―商家広告引札にみる大衆文化―

◇月日／7月21日(土)

◇講師／中谷哲二(当館学芸員)

明治時代は資本主義の消費文化のはじまりを告げました。商店が各家に配った「ちらし」である引札には当時の世相・民情が反映されています。その引札の



石灰セメント販売店引札 京都 川崎 巨泉画 明治中期頃 縦25.9cm

イラストを読み解いて明治に近づこうと思います。

第一七六回

「インドネシアの土器作り」

◇月日／9月22日(土)

◇講師／吉田裕彦(当館学芸員)

古代から中世にかけて日本で作られ、使用されていた素焼きの土器は、インドネシア東部の地方社会では現在もなお息づいています。日本の土器によく似たインドネシアの土器が作られている地方の暮らしや土器の作り方を紹介し、日本とインドネシアの文化の共通点や差異を検討します。



叩き板による土器の成形 インドネシア・スンバ島

収蔵品掲載の「案内」

当館収蔵品の中から選りすぐりの資料を担当学芸員がご紹介します。

◇奈良新聞

「やまとのほくら」

―天理参考館の文物紹介―

毎週火曜日 好評連載中



花文横笛 朝鮮半島 統一新羅時代 長39.8cm

利用案内

開館時間 午前9時30分～午後4時30分 (入館は午後4時まで)

休館日 毎週火曜(祝日の場合は翌日) ただし毎月25日、27日、4月17日、19日、7月26日、8月4日は開館

創立記念日(4月28日) 夏期(8月13日～17日)

入館料 年末年始(12月27日～1月4日) 大人400円、団体(20名以上)300円、小・中学生200円

交通 電車/JR桜井線天理駅・近鉄天理線 天理駅下車 東南へ徒歩約30分

車/西名阪道天理I.C.から国道169号線を南へ約3km(駐車場あり(無料))

その他 団体見学は事前にご連絡願います

世界の生活文化と考古美術の博物館

天理大学附属天理参考館

〒632-8540 奈良県天理市守目堂町250番地

Tel 0743-63-8414

Fax 0743-63-7721

URL <http://www.sankokan.jp/>

編集後記

今号は、平成19年度開催予定の展覧会や当館収蔵資料、海外調査の紹介、またトーク・サンコーカン(公開講演会)を編集しました。博物館が行っているさまざまな催事を通して資料の理解に結びつけばと考えています。今後も様々な情報や話題を掲載します。(片山)